

## 小説同人誌評 33

### 小さな神話

細見和之

年四回、季節ごとに書く約束になっていたこの同人誌評だが、前回あたりから季節がずれ込み、今回はとうとう冬の分を飛ばしてしまつたことになる。そのうえ、春と呼ぶのも憚られるようなずでにして初夏である。

それにしても、この間に、世界の様相は一変してしまつた。私は昨日三回目のワクチン接種を地元で行い、いまはその副作用の微熱がある身だが、こんな具合にコロナ・ウイルスとの付き合いにもようやく馴染んできたところで、ロシアによるウクライナへの露骨な侵攻がなされ、戦争状態は収束のきざしさえも見えない。生物と非生物の狭間にあるようなウイルスを、マスクとワクチンで何とか宥めてきたと思つたら、このざまである。言葉のつうじないウイルスよりも言葉のつうじるはずの人間同士のほうが共存が困難というのは、人類として恥辱以外の何ものでもない。さて、今回読んだなかでいちばんの力作は

『VIKING』第85号から第86号にかけて連載されている、内田謙二「哀れな喜劇(1)」、(2)、(3)、(4)だった。毎号、四百字詰め換算百枚強が掲載されているが、(4)で完結しているわけではない。むしろまだまだ続きそうな気配なのだ。高橋和巳の『憂鬱なる党派』の原型が同誌に断続的に掲載されたのをふと思いだした。調べてみると一九五九年から一九六〇年にかけてだった。もとより、『VIKING』の長い歴史のなかでこういうことはしばしばあったことなのだろうが、肝心の作品の中身である。以前に同じ作者が長めの小説として綴っていたフランスを舞台にした作品の続編という趣きである。ただし、前作でもそうだったと思うが、作者は「フランス」と呼ばずに「共和国」、「パリ」と呼ばずに「メトロポール」と一貫して綴っている。その共和国のメトロポールを舞台の中心として、主人公チクシ・ハヤト(筑紫隼人)の悪戦苦闘が「俺」(チクシ)の視点で粘り強く描かれている。

本作は、「俺」が「産業研究協会」(前作の主人公もここに勤めていたはずだ)を退職して、ストラスブルク(なぜかドイツ語読みである)大学で、特許関係の法学を学ぶところからはじまる。無事、修了試験に合格して、「俺」は「M&S事務所」という特許関係の大きな会社に再就職する。日本人顧客の接待

が事務所での「俺」の仕事である。そして、この会社M&Sとの確執がいまのところこの作品の主要部分となっている。その会社に約八年勤め、別の会社に移る際、「俺」は給料未払いでM&Sを訴え、一方M&Sは日本人顧客を新しい会社に引っこ抜いたとして「俺」を訴える。双方の不毛な訴訟合戦が続いてゆく。最後はその裁判を「フラン・マソン」(フリーメーソン)の会員が操っているらしいという話になっていて、それが「哀れな喜劇(5)」への布石となっている。作品の時代設定は、おおよそ一九九〇年代初頭から、いまのところ、二十一世紀のはじめまでである。

その裁判に関わる書類が(3)からは事細かに紹介される。途中、「俺」は「欧州の特許弁護士」になる試験を受けて三回目によく合格する。その試験の模様もじつに克明に描かれている。ただし、こちらはそれなりに興味を惹かれるのだが、裁判の書面の紹介はもうすこし圧縮できないものかと思う。「俺」はその間、「ミッシェル」という女性と結婚し、彼女は流産を経験する苦しみのおかげで、「俺」に特許弁護士の合格通知が届いたとき、涙を流して祝福する。そんな彼女との関係をもうすこし丁寧に描いて欲しいと思う。

そのミッシェルもそうだが、いささかマツチオ的に思える「俺」に対して、総じて作者の描く女性には不思議な魅力がある。スト

ラスブルク大学で授業のノートを貸してくれるミリアム、その判読の難しい文字をタイプ打ちしてくれるエレース。いずれもユダヤ系という設定になっているが、彼女たちの姿もとても印象深いのだ。

ともあれ、人種の垣塙、異文化、異言語、あるいはむしろ多文化、多言語のただなかで歴然たるマイノリティである日本人がこのように生きている姿を描写した作品として、大いに称賛されるべきだろう。同誌に毎号掲載されている合評会の記録によると、同人のあいだでこの作品の評価は分かれているようだが、誤植がけっこう目につくのも気になるが、作者および編集部には、どうか完結まで連載を継続していただきたい。

『あべの文学』第33号掲載の、河内隆雨「『バーサス』時間」も、四百字詰め換算一八〇枚に達する力作だった。

冒頭に短い「プロローグ」阪神大震災前年七月が置かれている。そこでは、父の画廊を引き継いで経営している神田が、疲れ果てた若い女性を見かける。神田の通報によって救急車がやって来るがその女性はそのまま死んでしまう。「ルック」もしくは「ルーク」という謎のような言葉を残して。このプロローグが最後まで作品の謎解きの役割を担っていることになる。そして「二十四年後十月」という区切りのあと、今度は佐崎勉を視点人物

にして物語が展開してゆく。

大学を出て健康食品会社に勤めていた佐崎は、「健康食品」のもついかかわしさに嫌気がさして、両親が亡くなったのを機に会社を辞める。そして、両親の残した木造二階建ての古屋を改装することを思い立つ。その古屋に久しぶりに帰って、高校時代に自分がスケッチしていたその古屋の改装図を目にしたのである。佐崎には不思議な予知夢を見る能力が備わっているという設定で、その改装図も当時の彼が夢に見たものだった。そのスケッチに基づいて実際に改装のデザインを担当してくれた天田理子（あまだ・のりこ）から、その家屋を画廊にするというアイデアを提示され、佐崎は画廊経営に乗り出してゆく。その彼を支えてくれるのが、プロローグに登場した神田である。

このあたり、いささか話しの展開がうまくゆき過ぎていく感じがあるが、天田理子の姉で抽象画家の南ゆう子が登場するところから、作品は哲学的な絵画論をも軸に奥行きを発揮してゆく。タイトルにある「バーサス」は南ゆう子が抽象絵画の新人賞を獲得したときの作品で、佐崎は神田画廊に置かれていたその「バーサス」を自分の画廊の第一号絵画として購入する。南ゆう子がかつて同じ抽象画家の南弦と結婚していて、離婚後も南姓を名乗っているのだった。かつては有望な若手と

して嘱望されていた南弦は一は、いまでは絵筆も取らずに、飲んだくれては管をまいている。

南ゆう子は抽象画家にとって重要な、二年に一度のシネレ展に出す大きな作品の制作に取り組む。シネレ展ではいちばん優れた若手にシネレ賞を与えることになっている。しかし、その審査委員のひとりによりにもよって南弦一が選ばれていることを知って、南ゆう子は意気消沈する…。

この物語と「プロローグ」がどう関わるか。ネタばれになるので控えるが、その謎解きの展開も十分スリリングである。

『せる』第119号掲載の、南水梨絵「金柑の木のある庭」は、日常のささいなズレ、違和感をゆったりと描いた四百字詰め換算一五〇枚ほどの作品。

あるとき「わたし」は帰りの電車に乗っていて「車体の揺れとともにすこしずつ空間がぶれゆくような感覚」を感じる。それ以来「わたし」の周辺では小さな異変が続く。恋人の「亮太くん」が「わたし」が嫌いなことを知っているはずのバナナ味のチョコレートを渡す。飼っている猫の「ハルミチ」は煮干しが大嫌いだっただけが、ぱくりと食べる。

「わたし」は私立中学校で美術の教員をして美術部の顧問も担当している。美術部の二年生に西野という気になる女生徒がいる。彼女は生まれつき左手の親指が欠損していて、

「からだの一部がない状態で生まれてくることがあるように、心がない状態で生まれてくる人間もいるの？」などと、難題を「わたし」に差し向けてくる。西野は美しい橋脚の絵を描いていたはずなのに、いま彼女のキャンパスには自我像が描かれている。そこにも不思議なズレがある。

あるとき「わたし」は恋人の亮太から「日常の違和展」という写真展を紹介される。亮太の古い友人、霧島純の写真展である。「わたし」はそのタイトルに惹かれてひとり出かけるが、女性客がひとりいるだけで、肝心の霧島にも出会えない。しかし、ひとりいたその客がじつは霧島純だった。実際に性転換手術を受けたということなのか、これもまた違和の一つなのか判然としないが、「わたし」のまわりには不確かなものが舞っているのだ。

タイトルにある「金柑の木」は、生家の裏庭にあったのを記憶のなから「わたし」が描いているものだが、生家に生えていたのはじつは「柿の木」だったことが判明する。もしもそうだった記憶の一つ一つが私たちを構成しているのなら、このズレは私たちを解体してしまいかねない。しかし、「わたし」はそれでも「心」をつうじての思考の連続性を唱える。「わたし」がわたしであることは、思考の、心の連続性をもって証明され得るのではないだろうか」と「わたし」は呟く。これはまる

でデカルト的な哲学小説でもあるのだ。

『メタセコイア』第18号では、よしむら香「空の青さを知る君へ」を印象深く読んだ。

まだ覚えていたかたも多いと思うが、三十歳過ぎの若者が刑務所から脱走し、自転車で山口県まで移動し、逮捕されるといふ事件があった。途中「日本一周中」というようなブレートとともにその当人がにっこり笑っている写真が残っていたりして、印象深い出来事だった。私は以前にもあの事件にもとづく別の作者の作品を読んでこの欄で紹介したことがあったが、この作品もあの事件に基づく。それだけ書き手の想像力を触発する出来事だったということだろう。

前に紹介した作品が、脱走犯が途中で出会った年長者との関係を軸に描いていたのに対して、ここでは「第一遭遇者 和田勉」、「第二遭遇者 島田将志」という具合に、複数の人物の視点で脱走犯（ここでは「津田順也」という名前が与えられている）の姿を浮かび上がらせようとする。「和田勉」は弁護士との接見のあと犯人に逃亡されてしまう若い警官であり、「島田将志」は小学校のときの津田の同級生で、津田が逃走に用いた自転車を提供するような役割も果たす。

さらに本作では、父親を知らずに育った津田が、母から伝えられた山口県にいる父のもとを訪ねるといふ設定になっている。父から

津田は、自分が「AID（非配偶者間人工授精）」で生まれた子だと知らされるのである。

いちばん印象的なのは「第四遭遇者 高瀬美穂」だ。彼女は重い病気を抱えて入院している父親の世話をしながら、「万引きGメン」といふ仕事をしている。一般客を装って、万引きの監視をするのである。それで、津田が山口県の「道の駅」で最後に万引きをしたときに、彼女が発見することになる。そのときに万引きを最終的に成立させまいとして、店を出てゆく津田に彼女が発した「だめーっ！出ちゃだめーっ」という言葉が切なく響く。

タイトルにはどういふ思いが込められているのか。津田はもとより他の「遭遇者」たちも、高瀬美穂を除けばみんな鬱屈を抱えている（高瀬の父親もそうである）。しかし、それぞれが「青空」を頭上に戴いている形で描かれている。「更生」というのはけっして好きな言葉ではないが、元来は「生を甦らせること」だろう。その意味での更生＝甦生がこの作品の主題なのだと思う。

『中津川文芸』第6号には、以前紹介した鴨居諒「夢の岸」が再掲載されている。同作が「全国同人雑誌最優秀賞」とともに「三田誠広賞」を授与されたからである。私も注目して紹介した作品だけにうれしい。同誌には受賞後第一作として鴨居諒「砂塵」がさっそく掲載されている。

「夢の岸」は散文詩のような静謐な文章で綴られた六つの断章からなる作品だったが、こちらは、長いあいだ喫茶店を営んできた夫婦の心の機微を、夫である「曜さん」の視点で描いた好短編。

心身ともにくたびれている妻を労るために、曜は妻を誘ってドライブに出かける。しかし、目的の場所には結局、到達できそうにない。お互いの過去、妻の病氣、夫婦の意に反して合衆国の若者と結婚してカリフォルニアへ行ってしまったひとり娘……。口には出さないことが互いの労りなのだ。

道に迷った曜たちの車は、途轍もない断崖を前にする。あたりには強い風が吹きつけている。それでも斜面には、満開の桜の木が一本生えている。夫婦は車のなかからその花見をするのだが、この光景にはたつぷりと寓意が込められているだろう。

最後、喫茶店で人気の、妻手製の大きなお握りが曜に差し出される。それは、パリパリの海苔で包んで食べる「漬けた高菜と野沢菜、それにめんたいこを種とした大きめのお握り」で、それがじつにおいしそうなのだ。曜も妻もまるで神話のなかの一人物のように思えてくる。そうなのだ、私たちはきつとひとりひとりが小さな神話を生きているのだ。

【「私人」第106号掲載の、根場至「小諸なる」は、地味ながらよくまとまった短篇。

信州佐久の藪塚酒店の店主、藪塚眞實（まさとみ）は八十二歳。妻の葉摘（はつ）と二人で、日本酒の蔵元、藪塚酒造の分家として酒の販売を担当してきた。夫の眞實は葉摘の藪塚家に婿入りした身だが、三人の娘たちは藪塚酒店を継いではいけなかった。長女雅子の末子で孫の陽子が結婚予定の相手を選りきたときには、陽子夫婦に酒店を継がせるといふ淡い期待を眞實は抱いたりもする。

そんな眞實にとつて唯一の誇りは、「古城」といふ銘柄を発売したことだった。島崎藤村の「小諸なる古城のほとり」にインスピレーションを得たものだった。従来、藪塚酒造は「佐久錦」といふ銘柄を一貫して醸造・販売していた。自家の酒蔵は、眞實のアイデアを一顧だにせず撥ねつけた。しかし、戦後十年をへたころ、佐久錦はそのまま販売しつつ、観光客の土産用に四合瓶の古城を売るといふ戦略を眞實は思いついたのだ。以来、古城は次第に売り上げを伸ばしていった。

結局、藪塚酒店は店じまいをすることになるのだが、「古城」は残った。これもまた小さな神話の一つに違いない。

同誌掲載の、みやがわ芽生「カトレア」は四百字詰め換算八十枚に満たない作品だが、そこに流れるゆたかな時間を感じさせてくれる。

父親を生まれるまえに亡くした「私」は、

母と祖父母に育てられた。母はいま昔ながらの商店街で「カトレア」といふスナックを経営している。「私」の子どもころは喫茶店だった。そのころ母は「私」にスチュワードスカアナンサーになることを勧め、そのため「私」に数々の稽古事を習わせた。その結果、「私」はみごとCA（キャビン・アテンダン）となる。しかし、「私」は不意にメニエール病を発症し、付き合っていたパイロットの吉野とも別れ、CAを辞めることになる。

しかし、ここからが本作品の本領である。母のスナック「カトレア」を手伝うようになってきた「私」は母が自転車と衝突して入院してからは店をひとりで切り盛りする。近所の常連客にくわえて、幼馴染みの川島陸もなにかと援助をしてくれる。陸は近所の床屋の息子だが、床屋を美容院に改装していまでは腕のたつ美容師として働いている。

あるとき、陸が理沙という若い女の子を「私」に紹介する。理沙は新宿のキャバクラで働いていたが、ホストをしていた男に騙されて、ひどく困っているという。理沙が「カトレア」で働きはじめ、スナックはいっそう繁盛する。しかし、ある日、理沙の元カレがやってきて理沙を連れ去ろうとする。陸が割って入り、その男ともみ合ううちに、男は陸の仕事道具の鋏を奪い、それで陸を刺す（このあたり、筋書きはいささか通俗的なのだが、文章自体

はしっかりと書かれている。

幸い陸の傷はさほど深くなく、「私」の母が入院していた病院から二人一緒に退院し、快気祝いの宴となる。やがて「私」は陸と結婚するが、陸は右腕に痛みをおぼえ、美容師の仕事が満足にできなくなる。そして、「私」が妊娠を告げたあと、出産にいたるまえに陸は海岸で亡くなる。その陸は亡くなるまえに男の子なら「大地」、女の子なら「宙（そら）」という名前を提案していた…。

この陸もまた神話のなかの人物だ。

『AMAZON』第510号掲載の、北川珪子「夜明けの人」では、主人公の「礼子」が早朝、スーパ―の仕事に出る前に習慣にしているラジオ体操に向かうところで、認知症らしき老婆と出会う。

家が分からなくなつたという老婆はかろうじて「いとう」と名乗り、自宅は七丁目とも六丁目の「渡壁の酒屋」とも言う。礼子は「渡壁の酒屋」ならよく知っていたので、そこまで連れてゆくことにする。それでも老婆の足どりは重く、ようやく「渡壁の酒屋」にたどり着いても、残念なことに老婆の自宅とは関わりがなさそうだ。礼子は次第に出勤の時間が気になりはじめる…。

結局、老婆の息子らしき人物が現われて、事なきを得るのだが、読みながら、自分ならどうするだろうと考えさせられた。行き場い

困っている認知症の老人と遭遇するというのは、誰にもあり得ることだ。そして、その誰しもが決まった予定を抱えている。認知症セ

ンターのようなどころか、場合によっては警察にでもすぐさま連絡すればよいのだろうか。この作品では礼子の亡くなった母が夢の中で、また現（うつ）でも姿を見せて、礼子を諷めたり促したりする。タイトル「夜明けの人」には、亡き母とともに、「いとう」と

名乗った老婆の姿が重ねられているだろう。予定の時間に雁字搦めに縛られている私たちがとって、認知症の老人との遭遇はやっかい

さわりないことだが、そういう不意の出会いが私たちの暮らしをゆたかにし得ると作者は言いたいのだと思う。「夜明け」というのは、予定で固められた一日に、かすかな隙間をこじ開けてくれる時間でもあるのだ。

同誌第511号掲載の、萬恭嗣「奈良阪」も、鎌倉時代、法然、親鸞の教えが広まるころの奈良阪周辺（奈良公園から北へ登る一帯）を、「神人（じにん）彦次郎の視点で歴史小説として掘り起こして貴重。「神人」は、寺社内の動物の死骸のケガレを清めるなどの仕事に携わり、被差別部落の人々とも関係が深かった。また当時奈良阪では、ハンセン病患者の救済もいち早く取り組まれていたのだった。『水晶群』第82号掲載の、杉本増生「振り乗車」は北川珪子「夜明けの人」と同じよう

な、こちらの思い通りにならない相手とのやっかいな関係を描いている。

「俺」は障害者の外出支援をするガイドヘルパーの仕事をしていて、きょうは二十七歳の「和樹さん」を神戸市の森林公園へ連れてゆくために、阪急電車の高槻駅から和樹とともに乗り込んだ。和樹には知的障害があつて、こちらの言うことはおおよそ理解しても自分では言葉が発しない。電車が梅田駅に着いたところで、神戸線に乗り換えようとしても、和樹は座席に坐ったまま微動だにしない。こういうことはこれまでもあったと無理強いないで坐っていると、とうとう電車の扉が閉まり、今度は京都方面へ逆戻りしてゆく。とうやう最初に和樹が坐つたのにつられて「俺」までが坐つたのよくなかつたらしい。

電車は京都河原町駅に着き、ふたたび大阪の梅田駅に向かって走りだし、という繰り返し。タイトルにあるようにまさしく「振り乗車」だ。とうとう電車が京都河原町駅を三度目に出発して、高槻駅に着いたところで「俺」は意を決して、和樹を何とか下ろさせることに成功する。その間、じつに五時間半。

とはいえ、車中での「俺」の態度は悲壮でもことさら深刻でもない。和樹を下ろした「俺」は二人でトイレを済ませ、コンビニでパンと牛乳を買って和樹に食べさせる。その姿にはむしろ静かな達成感が感じられる。